

稲穂北に輝く にぎりめし



令和4年度穂北中学校だより

2月号

穂北中HP

校長

伊東泰彦



オール西都での校則改正が行われました！



意見集約場面

西都市内の中学校6校は、昨年度より、全中学校で足並みを揃えて校則の見直しを行うこととし、「オール西都校則検討委員会」を組織し、取組を進めてきました。この組織は、当事者である中学生代表に加え、各学校のPTA及び職員の代表、そして地域代表者など36人で構成され、生徒たちからの改正提案について審議していきます。

本年度は「①髪型の規制緩和(ツープロック)」「②髪の結び方の規制緩和(ポニーテール、ハーフアップ)」「③校外生活における校則の廃止」

の三つが審議内容でした。七月の第一回検討委員会では「妻高校との協議やPTAへのアンケートをとるなどして再審議すべき」として差し戻されてましたが、12月26日の第二回検討会では提案が認められ、1月18日の中学校長会での最終審議を経て、現在試行中となっています。こうした改正検討のサイクルは今後も続いていきますので、後輩の生徒にもがんばって欲しいと思います。



穂北中代表生徒の発言場面



NPOカタリバ・起塚氏のコメント

▼決定事項を全校生徒に説明する全校生活委員長・副委員長



地域づくり協議会の皆さんありがとうございます！



指導してくださる地域の方々



昨年末の12月、穂北地区地域づくり協議会・子ども未来部会やPTAの方々のご協力をいただきながら、恒例のしめ縄づくりを行いました。注連縄は、天岩戸神話に由来する、神の領域の結果をなすもので、一般の地域ではお正月の注連飾りとして用いられています(西臼杵地区では一年中飾っています)。農耕文化としてのわら細工の一種でもあり、古来から連綿と継承されている貴重な文化でもあります。こうした文

▼あいさつ標語の作成と表彰、掲示

【最優秀賞】

あいさつで 始まる一日 絶好調(兒玉梨衣奈)

【優秀賞】

自分から 言えるといいね ありがとう(壹岐拓斗)
伝わるよ 相手に愛が 愛さつで(三島直進)

穂北づくり協議会長からの表彰



のぼり旗・校門前

化を地域の方々との協働で体験する活動は、穂北中の良き伝統だと思っています。また、同協議会の依頼を受け、恒例のあいさつ標語づくりにも取り組み、優秀作品のポスターやのぼり旗も寄贈していただきました。こうした地域との協働による取組は、再編までぜひ続いていく欲しいと思います。協議会の皆様、いつもありがとうございます。

対話力が向よしてきました！



終業式・始業式で恒例となったインタビュー・ダイログ

最近特に感じるのですが、本校の生徒たちの対話する力や表現する力が上がってきたと思います。上の写真は二学期の終業式の様子ですが、どの生徒も、自分の考えを自分の言葉で的確に表現でき、落ち着いて堂々とした語り口でした。「主体的・対話的で深い学び」が教育のキーワードとなつて以来、調べたり考えたりしたこと、「アウトプットすること」の大切さが指摘されてきました。頭の中で考えることはもちろんですが、その考えを自分自身で翻訳し・言語化するには更に一段上の力が必要となります。これまで様々な場面で協働や対話を行ってきましたが、その成果が出てきているのだと思います。こうして高めてきた力を、今後の高校入試面接や発表場面などで前面に押し出して欲しいと思います。



徳島県の大学生との哲学対話



入学説明会でのトークフォークダンス



さいと学での哲学対話



学習発表会での探究発表



さいと学アワード校内予選



学習発表会での探究発表

穂波 寿き田の里

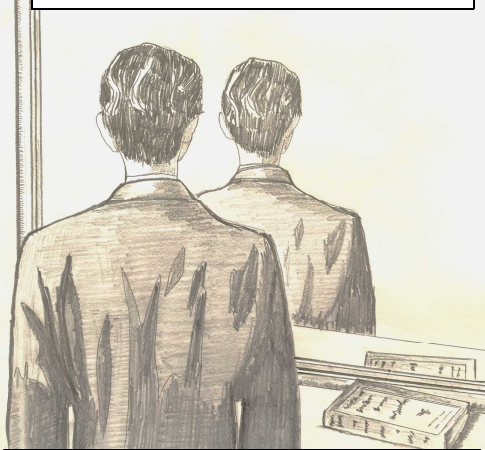
西都の魅力考②

一月の連休に、ようやく芥川賞作家・平野啓

一郎作の『ある男』を読んだ。「マチネの終わりに」(福山雅治主演)に並んで映画化された同氏のベストセラーである。すでに宮日新聞や広報さいとでも平野氏の講演記事で掲載されているが、小説中の「宮崎県の丁度真ん中辺りに位置するS市」とは紛れもなく我が西都市である▼映画を見てなかった分だけ、安藤サクラや窪田正孝、妻夫木聡が「まちなかにある文房具店」や「近所のうなぎ屋」にいる姿を想像するのは楽しい。ネタバレにならぬようストーリーには触れないが、他にも「名物のチキン南蛮」、「肝吸いの代わりについてくる郷土料理の呉汁」、宮崎の高校に通うための「バスセンター」、「花ちゃんの公園(西都原)」が季節ごとに桜や菜の花、コスモスで見事に彩られる「描写」などは西都の魅力そのものである。一方で、「バブル期は再開発で栄えたものの今は少子高齢化」、「シャッター通りは昭和古墳群と呼ばれる」など、現実課題への描写も厳しい▼こうした宮崎の中山間地の厳しい現実を題材にしている点は、前任地・日之影町をモチーフにした五木寛之の小説「日ノ影村の一族」(二六二)と同様であり、五木氏と平野氏が、ともに九州の福岡県出身であることと併せ興味深い。ただし「ある男」では、西都の素朴さを「心に深い傷を負った者(映画では安藤サクラや窪田正孝)が、心を癒やし幸せな生活を得ることのできた場所」として扱っており、この意味では、椎葉村を舞台にした小説「しゃぼん玉」(乃南アサ・著)と同じで、宮崎のもつ魅力としてこれも興味深い▼「ある男」でも印象深かったことが二つある。一つは作中にも出てくるルネ・マグリッドの絵画「複製禁止」(下に絵を模写してみました)。主人公の弁護士が長期間にわたり「ある男」の謎めいた人物像を追いかける中、これまで見えなかった人間像への理解を深めていくヒューマンミステリーの構図は、まさにこの絵の主題の投影であろう。もう一つは、巻末で中学生の息子が詠んだ俳句「蛭(むし)に いか(い)かに響くか 蟬(せみ)の声」。亡き父の愛した古墳群の桜にとまる蟬の蛭をみて、本小説のテーマすべてを込めた一句である。四年後の夏、蛭のようになつた穂北中の校舎には、地域や生徒たちの思いがいかに響いているのだろうか：そんな思いがよぎり、忘れられない一句である。

(校長 伊東泰彦)

※男は鏡の中を見つめるのだが、なぜか自分の顔をみることができないという絵



ルネ・マグリッド「複製禁止」(※模写)

ICT活用型の学習

一人一台のタブレット端末使用が始まり、学校の授業や教育活動のようすもかなり変わってきました。

本校でも、宿題・課題や朝自習の内容をタブレット使用のドリル教材活用にするなど、積極的な取組に着手しています。また、資料を紙ではなくデータで配布したり、重要な情報をタブレットに写真で収めたりするなどの活用も行っています。さらには、外部講師の方々とオンラインでつないで講和をしていただいたり、オンラインでインタビュー取材をするなどの取組も当たり前に行われており、利便性が高まっていると感じます。

こうしたICT・タブレットの活用は、今後ますます拡充していく予定ですので、随時お知らせしてまいります。

【2月・3月の主な行事】

2月

- 2日…県立高校推薦入試
- 3日…キャリアみらいゼミ(1年)
- 7日…学校評議員会(AM)
- 15・16日…定期テスト
- 21日…参観日、立志式(2年)

3月

- 6・7日…県立高校一般入試
- 9日…送別行事(校内)
- 16日…第76会卒業式
- 24日…修了式

いよいよ入試が本格スタート!

いよいよ受験シーズンが始まりました。本校の3年生も1月25・26日に私立高校の受験、2月2日に県立高校の推薦入試、そして3月7・8日に県立高校の一般入試となります。先日、県立高校の推薦入試志願状況が公表されましたが、「自己推薦方式」となり、以前の学校推薦制度の時代と比べ、推薦入試の志願者がかかなり増えているようです。

本校の3年生も、朝から放課後まで熱心がんばっています。進路実現に向け、ぜひがんばってほしいと思います。